

総説

奈良県の沿革

大和は国のまほろば

紀元前3世紀頃、日本列島に稲作がもたらされると奈良盆地は豊かな米作地帯となりました。大陸の高度な文化はこの地に開花し、大和の地は我が国の政治・文化の中心地として中国にならない、都城藤原京(694年)・平城京(710年)が造られ、飛鳥・白鳳・天平の輝かしい文化が醸成されました。

その後、都が平安京に移ったため、一時平城の都はさびれましたが、やがて社寺中心に甦り、鎌倉時代には、大和の国は興福寺・春日大社の荘園で占められるまでになりました。

戦国時代、この大和の地も戦乱が絶えることなく、幾多の興亡が繰り返されましたが、その後織田信長の庇護のもとにあった筒井氏が大和を統一しました。

江戸時代には、綿花・菜種・小豆などの商品作物や、三輪そうめん・吉野葛・宇陀紙・奈良晒・大和餅・吉野杉などの特産品が、隣接する大消費地大阪・京都に運ばれ大和に富をもたらしました。

明治20年に現在の奈良県が誕生

明治維新を迎えると、慶応4年1月に大和鎮台が設置され、以後、行政区画の改廃が繰り返されましたが、明治4年には大和国を統一した奈良県が誕生しました。しかし、明治9年堺県に合併、さらに明治14年には大阪府に合併とめまぐるしく変化し、その中で、大和の人々は奈良県の再設置を粘り強く求め続けました。ついに、明治20年11月4日、奈良県の誕生を迎えることができました。明治21年1月9日には、第1回奈良県議会が東大寺大仏殿回廊において開かれています。

明治22年4月1日の町村制施行当時、10町142村2組合村で、人口は50万人ほどでした。その後県勢の発展に伴い、昭和30年前後に市町村合併が促進され、またさらに、平成の大合併で平成16年10月には葛城市が誕生し、平成17年4月には月ヶ瀬村・都祁村が奈良市と、9月には西吉野村・大塔村が五條市と合併し、平成18年1月1日には、大宇陀町・菟田野町・榛原町・室生村が合併し宇陀市が誕生しました。現在は12市15町12村となり、人口約140万人となっています。

環境との調和をはかりながら

奈良県は、気候・風土に恵まれているものの、海がなく河川に乏しいという条件もあって、明治以降も農業・林業が産業の中心でしたが、昭和38年から始まった奈良県新総合開発計画をはじめとする県勢の振興計画による産業基盤の整備や公害のない工場誘致等により急速に工業化・都市化が進みました。人口は昭和40年代初めから50年代中ごろにかけて、大都市大阪等のベッドタウンとして急増してきましたが平成13年より減少に転じています。そうした中で、大和平野地域に人口が集中する一方、その他の地域では過疎化、高齢化が一段と進みました。そこで、美しい自然環境のもとで、健康で豊かな家庭生活を築きつつ平和で楽しい社会生活を共にし、世界各国とも直結した奈良県づくりの指針として、昭和59年に「奈良県長期基本構想」を策定しました。さらに、その後の社会経済情勢の変化、構想・計画段階であった事業の具体化も進んだため、「奈良県長期基本構想(修正)」を策定しました。そして、平成7年には社会の新たな潮流や本県の特性・課題を踏まえ、「奈良県新総合計画」を策定、また平成13年度からの5か年の県政を推進するための運営方針として「奈良県新総合計画後期実施計画」を作成し、さらに平成17年度には「少子高齢化や人口減少」など、これからの社会のあり方を大きく変化させる潮流を踏まえ、30年後の奈良の将来像を描いた「やまと21世紀ビジョン」を策定しました。

平成20年度以降、各種指標による現状分析や取り組みの評価、これらを踏まえた適切な指標による具体的な目標設定などを次の取り組みに反映していくという、マネジメントサイクルを着実に進めることで、「財政の健全化と必要な施策実現の両立」を目指しています。

県 政

奈良県年表

総 説

西 暦	年 月 日	事 項
1868年	慶応 4年 1月21日 5月19日 7月29日	大和鎮台が設置され、のち2月1日大和国鎮撫総督府と改称 奈良県を置き、(知事に春日仲義)これを管領 奈良県は奈良府と改称
1869年	明治元年 9月 8日 2年 6月17日 ~24日	明治と改元 各藩は版籍を奉還し、それぞれ旧藩を県とし知藩事を置く。 (郡山県-柳沢氏15.1万石、高取県-植村氏2.5万石、柳本県・芝村県-織 田氏各1万石、橿羅県-永井氏1万石、小泉県-片桐氏1.1万石、柳生県- 柳生氏1万石、田原本県-平野氏1万石の8県)
1870年	3年 2月27日	奈良府は奈良県と改称
1871年	4年 7月14日	奈良県の一部(旧宇智、吉野郡)を分け五條県を置く。 廃藩置県により大和国内に奈良県、五條県のほか、郡山県、高取県、小泉県、 柳生県、田原本県、柳本県、芝村県、橿羅県、和歌山県、津県、久居県、壬 生県、大多喜県が誕生
	11月22日	奈良・五條を含む15県を廃止し、奈良県を設置、県内に添上・添下・平群・ 山辺・式上・式下・十市・宇陀・高市・広瀬・葛上・葛下・忍海・宇智・吉 野の15郡に分け統轄(県令に四条隆平)
1876年	9年 4月18日	奈良県が堺県に合併
1881年	14年 2月 7日 11月29日	堺県が大阪府に合併され、大和15郡を4郡役所で所管 大和国一覧表によると15郡261町1,333村で戸数99,005戸、476,709人
1887年	20年11月 4日 12月 1日 27日	大阪府から分離して奈良県が再設置 奈良県が開庁(知事に税所篤) 第1回奈良県議会議員35名の当選告示
1888年	21年 1月 9日	第1回奈良県議会、東大寺大仏殿回廊で開会
1889年	22年 4月 1日	町村制が施行(10町142村2組合村)
1895年	28年12月15日	県庁舎が落成し移庁式を奉行
1897年	30年 8月 1日	郡制の実施、添下・平群を合わせて生駒郡、式上・式下・十市を合わせて磯 城郡、広瀬・葛下を合わせて北葛城郡、葛上・忍海を合わせて南葛城郡とし、 添上郡、山辺郡、宇陀郡、高市郡、宇智郡、吉野郡を合わせて10郡となり、 各郡に郡役所を設置
1898年	31年 2月 1日	添上郡奈良町に市制を施行
1926年	大正15年 7月 1日	郡役所を廃止
1942年	昭和17年 7月 1日	県内7カ所に地方事務所を設置
1947年	22年 4月 5日	初の公選知事選挙が行われる。
1955年	30年 9月17日	地方事務所を廃止
1956年	31年10月	吉野熊野特定地域総合開発計画が閣議決定
1963年	38年11月	奈良県新総合開発計画を策定
1965年	40年 3月18日	新県庁舎が竣工
1968年	43年 3月	第2次奈良県新総合開発計画を策定
1973年	48年 3月	奈良県長期基本計画(第3次)を策定
1978年	53年 3月	奈良県長期基本計画(第3次)[修正計画]を策定
1984年	59年 4月 9・10月	奈良県長期基本構想を策定 わかくさ国体を開催
1987年	62年11月 4日 12月 1日	奈良県置県100年を迎える。 第200回奈良県議会議を開催
1988年	63年 3月28日	関西文化学術研究都市(奈良県域)の建設に関する計画が内閣総理大臣の承 認を得る。
1991年	4~10月	なら・シルクロード博を開催
1992年	平成 3年10月 1日	香芝町の市制施行(10市20町17村)
1995年	4年 2月	奈良県長期基本構想(修正)を策定
	7年 4月	奈良県新総合計画を策定
	9月	第8回全国スポーツ・レクリエーション祭を開催
1996年	8年 7月	県分庁舎が竣工
	8月	情報公開制度がスタート
1998年	10年 4月	朱雀門・東院庭園復元記念事業「平城京98」を開催
1999年	11年 4月	単一農業協同組合が誕生
2000年	12年10月	個人情報保護制度がスタート
2001年	13年 3月	奈良県新総合計画後期実施計画を策定
2006年	18年 1月 1日 3月	平成の市町村合併(12市15町12村) やまと21世紀ビジョン及び実施計画(2006~2010)を策定

市町村変遷表

明治22年	変遷	現在
奈良市	奈良市(明31)	奈良市
良保跡	(大12)	
町村	(昭15)	
安寺	(昭26)	
大東市	(昭30)	
平辰ヶ谷	(昭2)	
五ヶ解	(昭28)	
明治村(添上郡)	(昭25)	
富雄	(昭32)	
伏見	(昭32)	
柳生	(昭32)	
大東里村(添上郡)	(昭32)	
狭川	月ヶ瀬村(昭43)	
月ヶ瀬	都祁村(昭30)	
針ヶ野	都祁村(平3)	
高田	大和高田市(昭23)	大和高田市
土庫村(組合立)	(昭2)	
松塚	(昭16)	
浮磐	(昭31)	
天郡筒	(昭32)	大和郡山市
山井	(昭16)	
平治	(昭28)	
欠平	昭和村(昭10)	
本桐	片桐町(昭25)	
櫛本	櫛本町(明27)	
二階堂	天理市(昭29)	天理市
朝山	丹波市町(明26)	
福柳	柳本町(大12)	
耳成	畝傍町(昭3)	橿原市
白鴨	橿原市(昭31)	
八木	(昭31)	桜井市
今真	桜井町(明23)	
新金	(昭17)	
桜城	(昭29)	
多武倍	(昭31)	
安朝	(昭31)	
香大	(昭31)	
上初	初瀬町(明24)	
織瀬	(昭34)	
三輪	大三輪町(昭30)-(昭38)	
向輪	三輪町(明24)	

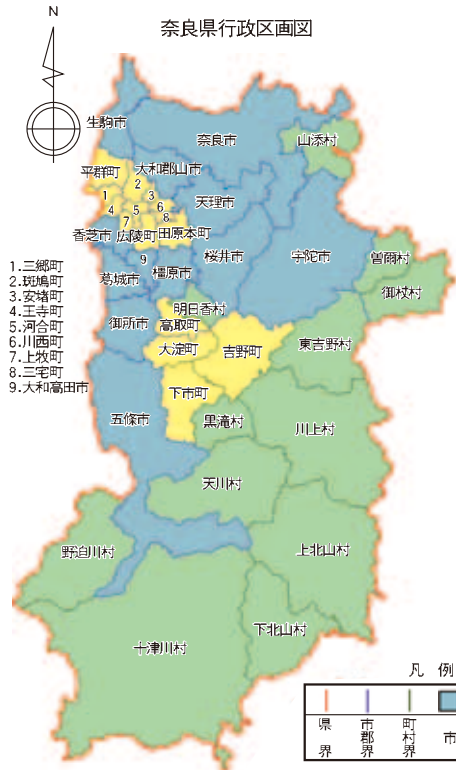
明治22年	変遷	現在
五條市	野原町(昭3)	五條市
合智部	大阿太村(明24)	
宇太	南阿太村(明24)	
野智生	(昭34)	
牧南賀宗白大御秋掖葛吐葛柳橋三鎌東竹西小北南北五二下志新忍當磐松山始戸	西吉野村(昭34)	
宇賀原佐松	(平17)	
伊那牧生	(昭29)	
内空三	(昭30)	
東里村(山辺郡)	葛上村(昭31)	
東波山	御所市(昭33)	
豐原	大正村(大4)	御所市
明治村(平群郡)	(組合立)	
三竜法富安川三	生駒町(大10)	
	(昭30)	
	(昭32)	
	生駒市(昭46)	
	香芝町(昭31)	
	香芝市(平3)	
	新庄町(大12)	
	(昭31)	
	葛城市(平16)	葛城市
	當麻村(昭31)	
	當麻町(昭41)	
	大宇陀町(昭17)	
	(上竜門村)	
	宇太町(昭10)	
	菟田野町(昭31)	
	宇陀市(平18)	
	榛原町(明26)	
	(昭29)	
	(昭30)	
	室生村(昭30)	宇陀市
	山添村(昭31)	
	平群村(明29)	
	平群町(昭46)	
	三郷町(昭41)	
	竜田町(明25)	
	斑鳩町(昭22)	
	安堵町(昭61)	
	川西町(昭50)	
	三宅町(昭49)	
	山添村	山添村
	平群町	
	三郷町	平群町
	斑鳩町	
	安堵町	安堵町
	川西町	
	三宅町	川西町

明治22年	変遷	現在
出原本町	田原本町(昭31)	出原本町
平野東村		
川都多		
皆爾村	高取町(昭29)	皆爾村
御杖取		
高智岡	高取町(昭29)	高取町
越船		
智倉合	明日香村(昭31)	明日香村
阪高		
飛上市	上牧町(昭47)	上牧町
鳥牧		
王寺	王寺町(大15)	王寺町
見馬		
南尾	広陵町(昭30)	広陵町
合河		
竜門	河合町(昭46)	河合町
吉野		
吉野	吉野町(昭31)	吉野町
国棟		
上澁	大澁町(大10)	大澁町
下市		
南芳野	黒澁村(明45)	黒澁村
天川		
野迫	十津川村(明23)	十津川村
東津		
西津	十津川村(明23)	十津川村
南津		
北津	下北山村	下北山村
中津		
上北	東吉野村(昭33)	東吉野村
川上		
四見		
高小		

行政区画

市町村数 12市15町12村

奈良県行政区画図



位置

近畿の屋根といわれる山岳地帯を南部に持つわが奈良県は、わか国のはほぼ中央部、紀伊半島の真ん中に位置し、周囲を山岳に囲まれた内陸県です。

方位	経緯	地名
東端	東経136度13分48秒	宇陀郡御杖村大字神末
西端	東経135度32分23秒	吉野郡野迫川村大字弓手原
南端	北緯 33度51分32秒	吉野郡 津川村大字竹筒
北端	北緯 34度46分53秒	生駒市高山町

両極間の距離 東西 78.6km 南北 103.4km
県庁所在地 奈良市登大路町30番地
(東経135度49分58秒 北緯34度41分7秒)

面積

奈良県の面積は、全国面積(377,943.57km²)の約1%の3,691.09km²です。市町村で一番広いのは、672.35km²の吉野郡 | 津川村で県面積の18.2%を占めています。最小は、磯城郡三宅町で4.07km²です。(数値は平成20年10月1日現在)

	面積	割合
奈良県	3,691.09km ²	100.0%
市部	1,272.21km ²	34.5%
郡部	2,418.88km ²	65.5%

地形

本県の地形は、吉野川に沿ってほぼ東西に走る中央構造線により、南部山地(吉野山地)と中央低地(北部低地)に分かれています。北部低地帯は、瀬戸内陥落地帯の東部にあたり、断層により陥落した地溝盆地である奈良盆地を中心に、これをとりまいて生駒・葛城・笠置の各山脈、竜門山塊、奈良丘陵の山地からなっています。

奈良盆地は南北30km、東西16km、面積約300km²で、海拔40~60mの非常に平坦な沖積層からなっています。河川は盆地の東南隅より流出する初瀬川を主流として、四周の河川を合して大和川となり、生駒金剛山脈を横断して大阪平野へ流出しています。

奈良盆地東側に隣接している大和高原地区は海拔400~500mの高原です。また、宇陀山地は竜門山塊の東に位置し、海拔300~400mの宇陀盆地と高見山麓、室生火山群地帯とからなっています。

南部山岳地帯は本県の南部一帯を占める山岳地帯で、東は台高山脈を隔て三重県に、南西は和歌山県に、北辺は竜門山塊によって大和平野、大和高原地区に接しています。

中央部は大峰山系によって西の | 津川流域と東の北山川流域とに分けられ、大台ヶ原、伯母ヶ峰、山上ヶ岳、大天井岳、武士ヶ峰、天辻峠を連ねる横断山脈によって、北側の吉野川流域と分水嶺をなしています。大台ヶ原や大峰山脈は山岳美、溪谷美に富み、吉野・熊野国立公園に指定されています。



紀伊半島

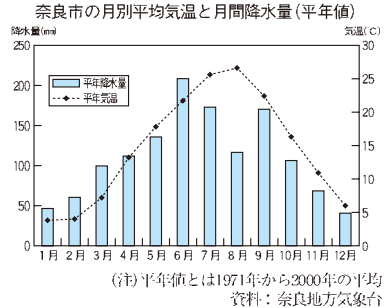
提供：財)リモートセンシング技術センター

地 質

西南日本における地体構造線である中央構造線は、本県のほぼ中央部を東西に貫通しています。このため、本県は地質構造上南北の二部分に分かれ、それぞれ西南日本の外帯（南部山地）、内帯（北部低地）に属しています。これらの両地帯を構成する諸岩層はさらに古期、新期の二種類に分けることができます。従って、本県の地質は基本的には北大和（内帯）、中央帯、南大和（外帯）に三大別され各部分には古期岩層と、新期岩層とがあるので、結局六つの単元に分けられます。（参考文献：堀井甚一郎著「奈良県地誌」）

気 象

本県の気候は概ね温暖ですが、地形と同様南北で大きく相違します。気候区分によると吉野川を境として、南部は山岳で占められ山岳性気候、北部は盆地で内陸性気候です。東部山地は内陸性気候と山岳性気候の特徴を兼ねています。即ち、南部の山地は夏に雨が極めて多く、時には局地豪雨が起り、冬はきびしい冬山の様相を呈し、積雪もかなり深くなります。一方、奈良盆地は概ね雨は少なく、夏はむしろ暑く、冬は底冷えが厳しくなります。一般的には、台風のような大きな現象による影響よりも、むしろ地形の複雑さによる大雨、河川の氾濫、山・がけ崩れ等の災害と局地的な強風が目立っています。また盆地、高原地方では夏の干ばつ、冬の夜間冷却による異常低温、霜及び霧の発生等の気象災害もしばしば起こります。



人 口

本県では、旧石器時代からすでに人々が活動していたことが知られています。先史時代の遺跡数から人口を推計した研究によれば、縄文時代の近畿の人口はほぼ300～4,400人の間で推移していました。これが弥生時代には108,300人程に急増したとされています。本県の人口の推移もこれと軌を一にしていたとみられ、稲作の普及と共に人口が急増し、後の大和朝廷成立を促す社会的・経済的な基盤を確立していったのであろうと考えられています。

大和に朝廷が成立し、政治・文化の中心地となると、その都の人口は巨大なものとなりました。藤原京の人口は1～3万人といわれ、これに続く平城京は少なくみると7万人前後、多く見積もって20万人の人口を持ったといわれています。仮に20万人説をとるならば、平城京内の人口密度は、14,000人/km程になり、唐の長安よりやや少なく、平成20年の大阪市（11,930人/km）より多くなります。7万人程であったとしても奈良の都は当時世界有数の大都市であったことに変わりありません。

また、奈良時代の平城京を除く大和の人口については13万人説と6万5千人説とがあります。

中世の人口は史料がないため知ることができませんが、江戸時代になると八代将軍徳川吉宗の時代の享保6年（1721）から始められた全国人口調査があります。第2回は同11年に実施され、以後6年毎に行われました。この調査は、武士の人口や年少者の人口が除かれていることなどいくつかの問題があり、実際の人口より幾分過小であると思われます。しかし、現存している史料によって計10回分の大和国の人口を知ることができます。

享保6年（1721）の413,331人を100とすると、天明6年（1786）には81.4（336,254人）にまで減少しましたが、文化・文政の頃から増加に転じ弘化3年（1846）には87.4（361,157人）にまで回復しています。

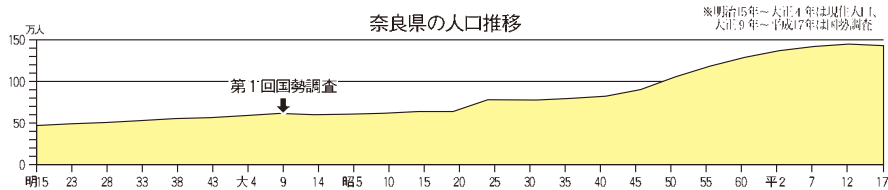
明治の初めには、人口の調査もほぼ実勢に近くなり、明治5年（1872）の記録では423,004人となっています。奈良県再設置当時の明治20年（1887）には、491,185人であり、幕末以来の人口増加がさらに進んだことを示しています。

大正9年（1925）の第1回国勢調査の人口は564,607人であり、明治5年から約半世紀の間に33.5%の増加を示しました。

その後、人口は60万人程度で安定していましたが、昭和20年代には戦時中の疎開者、戦後の引き揚げ者の流入にベビーブームが重なったため、一挙に80万人近くに増加しました。昭和35年以降には盆地部での過密化と山間部の過疎化が同時に進行しましたが、県全体としては著しい人口の増加をみるようになります。国勢調査で対前回調査からの増加率をみると昭和45年で12.6%、昭和55年で12.2%の高い伸びを示しました。

しかし、昭和60年には7.9%、平成2年には5.4%、平成7年には4.0%と鈍化傾向が進み、平成12年には0.8%となり、昭和40年以来はじめて1%を下回りました。平成17年国勢調査では人口は1,421,310人で増加率は△1.5%となり、昭和30年以來初めてマイナスとなりました。このように、本県では、昭和38年以來、北西部地域が大和という大都市の通勤圏として宅地開発が進んだこともあり、大阪を主とする他府県からの人口の流入が進み、40年代、50年代には高い転入超過を示していましたが、近年は、少子化の進行や県外からの転入者の減少などの影響により、伸び率は減少に転じています。

住民基本台帳人口移動報告によると、平成2年以降は転入超過数も減少傾向にあり、平成10年には36年ぶりに転出超過に転じ、平成20年も11年連続で転出超過になりました。



産 業

【農 業】

奈良県では、恵まれた気象条件や高い生産能力を活かして、古くから農業が発達してきました。奈良盆地には雨が少ないことから多くのため池が造られ、近世には、米の他に綿や菜種、たばこ等の商品作物が盛んに栽培され、「田畑輪換」と呼ばれる水田畑作の営農形態が確立されていました。現在は、京阪神大消費地への至近性を活かし、多品目少量生産ながら高度な栽培技術を駆使した生産性の高い多彩な農業を展開しています。

大和平野地域では、米をベースに、野菜（いちご、トマト、なす、ほうれんそう等）や「花き」（きく、ばらなどの切り花やシクラメンをはじめとする鉢花等）の収益性の高い施設栽培が盛んに行われています。

大和高原地域では、国営で開発された農地を中心に夏期冷涼な気象条件を活かしたお茶や高原野菜の生産が盛んであり、畜産や花き・植木栽培も行われています。五條吉野地域の北部は、国営で開発された農地を中心にかきやうめなどの果樹栽培が盛んであり、かきは全国屈指の産地となっています。また、南部ではわさび、山菜、きのこなど地域の特性を活かした特産品の生産が行われています。

県では、奈良の美味しい「食」の創造と発信、マーケティング戦略に基づいた農産物の振興、意欲ある担い手の育成と新規就農者への支援、農地の保全・有効活用を柱としながら、奈良らしい農業・農村の活性化を図るための農林水産施策を展開していきます。

主要農産物の生産量・産出額（平成20年）

	生産量（t）	産出額（億円）	全国順位（生産量）
かき	29,200	50	2
うめ	2,200	5	6
荒茶（加工）	2,360	11	6
いちご	2,970	21	14
なす	7,440	14	12
ほうれんそう	4,480	17	21
切り花きく	4,340万本	12	7
米	49,400	116	41

資料：近畿農政局奈良農政事務所

【林 業】

本県の林業は、県総面積の77%を占める恵まれた森林と豊富な木材の蓄積を背景に、山村地域の基幹産業の一つとして重要な地位を占めています。

吉野地方では足利末期（1500年頃）に造林が行われた記録があり、森林の半数以上がスギ・ヒノキで占められています。明治時代には、多くの村外の地主が林業経営にのりだし、早くから民有林林業が発展してきました。地質と気象条件に恵まれているうえ、密植多間伐という独特な育林方法がとられていることから、県産の木材は、年輪幅が狭く均一で、見た目にも美しく、強度に優れ、建築用材として高い評価を受けています。しかし、昨今の森林・林業を取り巻く情勢は、国産材の自給率は若干上昇しているものの、木材需要の低下や木材価格の低迷などから、間伐をはじめとする適切な施策が十分に行われず、森林所有者の高齢化、世代交代による経営意欲の減退及び林業労働者の減少などにより、厳しい状況にあります。

このような状況に対処するため、本県では、目指すべき森林を、「木材生産」と「環境保全」に大きく区分し、森林の整備や林業・木材産業の振興並びに山村地域の活性化に取り組んでいます。そういった中で、県産材安定供給体制の構築をテーマに、川上から川下までの連携による一体的な木材生産販売体制の構築を目指し、県産材の需要拡大をすすめているところです。

【商 業】

江戸時代には門前町であった奈良町、郡山藩の城下町として栄えた郡山が、最盛期にはそれぞれ2万人以上の人口をもつ二大商業中心地でした。高田、御所なども農村加工品の流通の中心地として発展していました。しかし、このころから奈良県は大阪の経済圏に含まれ、本県全体を掌握する中心地はできず、時代が明治に至ってもこの状態は変わりませんでした。

明治25年の関西線の開通、大正3年の大軌電車（現在の近畿日本鉄道）上本町～奈良間の開通をはじめ

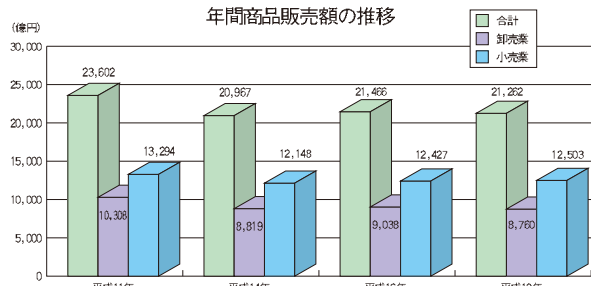
とする鉄道網の整備は観光客を増やし、新たな商店街の形成をみるところもありました。

しかし、当時の商業は主に農家を相手の小規模なものが多く、大正時代には米価の下落の影響で打撃を受けるものもありました。昭和5年の国勢調査によると、商業従業者（当時の職業分類）のうち、家族の補助も受けず自分一人で営業しているものが32%も占めていました。

昭和9年には県内4銀行が統合して南都銀行が生まれ、28年には三栄相互銀行（後の奈良銀行、現りそな銀行）が奈良市に設立され、本県に支店を持つ県外の銀行とともに奈良県の商業の発展に貢献しています。

昭和40年代以降、大阪等からの人口の流入が著しく、こうした傾向は購買力を高め、商品販売額の増加に結びつきました。また、平成19年の商業統計によれば、本県小売業の年間商品販売額は1兆2,503億円で、前回調査とほぼ横ばいの結果となっています。

今日の中小売商業を取り巻く環境は、モータリゼーションの進展による立地環境の変化、後継者不足、リーダー不足などにより、非常に厳しいものとなっています。奈良県は、商店街の活性化に向けて意欲ある商店街に対して、市町村・商工会議所・商工会と連携し、まちづくりの観点から商店街活性化に努めています。



【工業】

奈良県の工業の中には墨・筆・和紙・薬・漆器・素麺・清酒・茶筌・割箸・赤青焼など、江戸時代、あるいは古代、中世にまでさかのぼる長い伝統をもつものが多くあります。

江戸時代には、奈良晒や綿織物に代表される都市手工業や農村工業が発達していました。明治7年(1874)には、奈良県は全国の中で、農具が4位、綿糸が5位、綿織物が7位、菜種油9位の生産をあげ全国でも先進的な地域に属していました。そのため資金が豊富で明治16年(1883)には早くも近代的紡績工場が設立されましたが、この工場は石炭の入手や、営業面でおもわしくいかず廃業となりました。

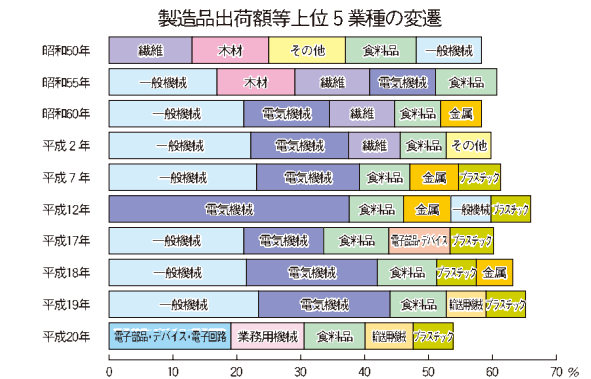
明治26年(1893)、同29年(1896)に新たな近代的紡績工場がそれぞれ設立、同27年に電気・同44年にガスの供給がはじまるなどめざましく近代化していきました。しかし、奈良の位置が東西幹線からはずれていたこともあり、工業生産額が農業生産額を上回るのは大正8年(1919)にもちこされました。

昭和のはじめには、紡績業の生産は安定し木綿や絹から変わったメリヤス、貝ボタン、靴下、皮革などの地場産業の形成も進みましたが、戦争のために挫折するものが多くありました。

戦後、奈良県も復興の途につきましたが、本県の工業は農村に基盤をおく零細規模の軽工業が多く、昭和30年代の高度成長期にも繊維、木材、食品等の業種が大きなウエイトを占めていました。本県は内陸に位置し港湾を持たないので、重化学工業には工場立地の上で制約が大きかったためです。このため、昭和30年代末から県では工業団地の開発に取り組み、内陸型工業の誘致・育成に努めるとともに県内工業の活性化をめざし中小企業団地の開発を支援してきました。

昭和40年代に入って、昭和工業団地等が本格的に換業を開始すると、一般機械、電気機械等の製造品出荷額等は飛躍的に増加し、その占める割合は昭和40年代初めまで、20%以下だったのが、昭和60年には30%を超えました。平成の初期には、県や民間デベロッパーによる工業団地の完成が相次ぎ、県外からの企業立地が進みました。

奈良県の地場産業としては、靴下・ニットなどの繊維、木材、機械金属をはじめ、プラスチック成形、毛皮革製品、サンダル、スポーツ用品などがありますが、近年では、創業や経営革新、新規成長産業への支援体制、産研学連携による研究支援体制等を整備し、県内の起業化シーズの発掘、育成に取り組みとともに、県外からの企業立地を促進することなどにより産業の活性化が図られています。



(注) 統計処理上、「一般機械」から「電気機械」への移動が発生したため「一般機械」の金額は12年は大幅に減少しました。14年より「電気機械器具製造業」は「電気機械器具製造業」、「情報通信機械器具製造業」、「電子部品・デバイス製造業」へ3分割されました。平成20年より産業分類が改定されました。
資料：県統計課「奈良県工業統計調査結果報告書」

文化・観光

豊かな自然と世界に誇る数多くの文化遺産を有している奈良県は、古代から政治の中心として、大陸からの文化を積極的に取り入れてきました。特に古墳時代、飛鳥時代、奈良時代には遣隋使・遣唐使等の国際交流を通じて日本文化の基礎を築きあげ、さらに中世には、社寺・町屋を中心に能・狂言の発祥地として、日本文化の発展に貢献してきました。

また、近世から明治・大正・昭和にかけて多くの時代を代表する人物が、奈良の豊かな自然とそこに住む人々が育んできた伝統文化を賞美してきました。奈良は、「日本人の心のふるさと」であり、世界に誇り得る日本文化の中心となっています。

本県では、こうした先人が育み培ってきた貴重な文化遺産や歴史的風土の保存を図るとともに、県民参加による新たな文化芸術の創造と発信に努めているところです。

本県の観光には、奈良盆地を中心とした史跡・古社寺などの文化財などをめぐる観光と、山岳地域の自然に親しむ観光の二つの面があります。

まず、「法隆寺地域の仏教建造物」と「古都奈良の文化財」の、二つの世界遺産に代表される古社寺には、飛鳥・天平などの各時代を代表する仏像や建築物が数多くあり、そのほかにも、飛鳥・藤原・平城の宮跡などの史跡も多く、歴史の舞台を訪れる人々は後をたちません。

また、南部には千年以上の歴史をもつ吉野山の桜や登山・ハイキング客でにぎわう大台ヶ原・大峰山系などの雄大な自然、津川温泉や洞川温泉などに代表される数多くの温泉があり、このうち吉野・大峯の霊場と大峯奥駈道・熊野参詣道小辺路などからなる「紀伊山地の霊場と参詣道」も、「道」としては日本で初めて世界遺産に登録されました。

さらに、明日香村、橿原市、桜井市の一部が「飛鳥・藤原の宮都（きゅうと）とその関連資産群」として世界遺産暫定一覧表に追加記載され、奈良県の4つ目の世界遺産登録に向けた取り組みを進めています。

このような豊富な文化遺産や自然を求めて、本県には毎年多くの観光客が訪れていますが、エコツーリズムといった自然環境や歴史文化を体験し学ぶという観光のあり方が注目を集めている中で、奈良県はますますその価値を高めつつあります。



藤原京のコスモス



吉野山の桜